



杜 甫 Ⅱ

吉川幸次郎 訳

世界古典文学全集

29

筑摩書房

杜 甫 Ⅱ

世界古典文学全集 第29卷

---

昭和47年 8月30日第一刷発行

訳 者 吉 川 幸 次 郎

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2-8  
振替東京 4123 電話 (291)7651  
郵便番号 101-91

---

(分類) 0398 (製品) 20329 (出版社) 4604

目次

杜甫詩集 卷三 疎開の歌

- 1 奉先県庁劉課長えがきしばかりの山水屏風の歌 (奉先の劉少府の新たに画がきし山水障の歌)
- 2 白水県事務官崔のおじが山の寮にての三十脚韻 (白水崔少府十九翁の高齋三十韻)
- 3 三川県で見た洪水 (三川にて水の漲るを觀る二十韻)

- 1 陳陶悲歌 (悲陳陶)
- 2 青坂悲歌 (悲青坂)
- 3 水辺哀歌 (哀江頭)
- 4 王孫哀歌 (哀王孫)
- 5 九月九日 藍田県の崔氏の山荘にて (九日藍田の崔氏荘)
- 6 崔がいえの東の山の草堂にて (崔氏の東山の草堂)
- 7 雪にむかいて (雪に対す)
- 8 月のよるに (月夜)
- 9 うさをはらして (遣興)
- 10 元日 (元日)
- 11 春のながめ (春望)
- 12 末っ子のことを思つて (幼子を憶う)

6 33 18 44 46 48 54 63 68 71 72 75 77 80 84

杜甫詩集 卷五 行在所の歌

- 13 春の節句 月にむかいて (二百五日の夜る月に對す)
- 14 大雲寺贊上人の僧房にて四首 (大雲寺贊公の房四首)
- 15 鄭騎士の釣り殿にて鄭虔教授とめぐりあい酒くみかわせし喜び (鄭駙馬の池台にて鄭広文に遇い同じく飲むを喜ぶ)

- 1 行在所にたどりついでての喜び三首 (行在所に達するを喜ぶ三首)
- 2 わがおもい (述懐)
- 3 長孫監察官の武威軍參謀長としての赴任を送る (長孫九侍御の武威の判官に赴くを送る)
- 4 樊監察官の漢中軍參謀長としての赴任を送る (樊二十三侍御の漢中の判官に赴くを送る)
- 5 従弟杜亜の安西都護府參謀としての赴任を送る (従弟の亜の安西の判官に赴くを送る)
- 6 韋判事の同谷郡防禦使參謀としての出向を送る (韋十六評事の同谷郡防禦判官に充てらるるを送る)
- 7 侍従の嚴武氏にささぐ (嚴八閣老に贈り奉る)
- 8 月 (月)
- 9 檢察庁次長兼車馬頭郭英父氏の隴右節度使としての出向を送り奉る三十脚韻 (郭中丞兼太僕卿の隴右の節度使に充てられるを送り奉つる三十韻)
- 10 楊參謀のチベット派遣を送る (楊六判官の西蕃に使いするを送る)

86 89 100 104 110 120 126 133 141 149 151 152 168

杜甫詩集 卷六 帰省の歌

- 11 手紙がついた(家書を得たり) 175
- 1 北への旅(北征) 179
- 2 旅立ちにあたり賈至敵武など役所の同僚におくる(賈敵の二  
閨老の兩院の補欠とに留別す)
- 3 九成離宮(九成宮) 204
- 4 徒歩の帰り路のうた(徒歩帰行) 206
- 5 玉華離宮(玉華宮) 212
- 6 夕暮れの旅の即興(晩行の口号) 214
- 7 ひとり酒くみてよみいでしうた(独酌して詩を成す) 218
- 8 羌のむらにて三首(羌村三首) 220
- 9 彭衙の長歌(彭衙行) 222
- 10 官軍はやくも賊兵にまむこうと聞きそのよろこび二十脚韻  
(官軍已に賊寇に臨むと聞くを喜ぶ二十韻) 229
- 11 還都三首(京を取む三首) 236
- 12 年こしの祭りの日に(臘日) 245
- 13 鄭虔が台州戸籍係長への貶謫を送る。年老いし身の賊軍にけ  
がされしゆわれいとおしきに、まのあたりの別れせず。わ  
が思い、歌にするし。(鄭十八虔の台州の司戸に貶せらる  
るを送る。其の老いに臨みて賊に陥りし故を傷み、面別を  
為すを欠く。情は詩に見わる。)

補注  
月表  
参考地図  
あながき

杜

甫

Ⅱ



## 杜甫詩集 卷三 疎開の歌

この巻以後は、すべて安祿山あんくわんざんの反乱勃発以後の詩である。

そのさいしょとなるこの巻は、反乱勃発の直後、四十四歳の冬から翌四十五歳の夏までの半年間、家族とともに、陝西の北部を、転転とした時期の古体詩三首、すなわち句中の平仄の配置が自由な詩三つを、内容とする。ただしはじめの一首は、のちに述べるように、この時期の作と有力に推測されつつも、確証をもつに至らない。

異民族出身の將軍安祿山は、玄宗皇帝の信任を受け、平盧、范陽、河東と、三鎮の節度使を兼ねていた。つまり河北と山西の広大な地域にわたっての軍司令官であった。それがかねての取り沙汰どおり、遂に反旗を、駐屯地ベキンであげて、東都洛陽へむかったのは、杜甫四十四歳の天宝十四載の十一月九日、日本では孝謙天皇の天平勝宝六年、陽曆に換算すれば、AD七五五の十二月十六日である。それは四十五年にわたる玄宗の治世の太平、ないしは唐王朝創業以来百五十年の太平の、終焉であった。そうしてまた杜甫個人にとっても、生涯の転機である。

この重要な時間に、杜甫は国都長安にいなかった。長安の東東北一六〇キロの奉先県に、かねて食糧疎開をさせてあった家族を見舞うため、そこへの旅の途中にあった。ないしは旅をおえて、奉先県に着き、末の男の子の夭折を知ったばかりであった。さきに巻一の末とした長詩「京自ら奉先県に赴く詠懷五百字」が、その経過を詳叙する。その題下に「天宝十四載十一月初の作」と自注するのは、旅行が唐の国家にとっても、みずからにとっても、重要な時期にあったことを示す。

奉先県は唐の畿内である京兆府の屬縣の一つ、唐の李吉甫の「元和

郡県図志」一に、長安の東北二百四十華里と記す。長安を東京とすれば、あだかも日光ほどの距離と方角にある。玄宗の父睿宗皇帝の陵が、橋陵と名づけて、そこにいとなまれていることも、日光と似る。反乱勃発のやや前、杜甫はそれまで住んでいた長安南部の下杜の莊園が飢饉におそわれ、「荒歳に兒女は瘦せ」た。そのため家族を奉先県へ連れて行き、役人たちの好意により、県の役所に寄寓を許されたこと、巻一35「橋陵の詩三十韻、因りて県内の諸官に呈す」に見える。

その後しばらくして、杜甫は、多年の仕官ののぞみを達し、右衛率府の兵曹參軍、すなわち皇太子禁衛隊の兵員課長、従八品、に任ぜられる。しかし、任命は皮肉にも、安祿山率兵の直前であったこと、巻二55「官定まりて後に戯れに贈る」の注を参照されたい。この任官の後、杜甫は奉先に家族をおいたまま、単身で長安に帰っていたと思われ、それが「天宝十四載十一月の初め」、しばらくぶりに家族を見舞うべく、田舎に赴いたのが、あだかも反乱勃発の時間とぶつかったのである。

かく天宝十四載十一月の初め、あだかも反乱勃発のその時間に、奉先県におもむいた杜甫の、それからしばらくの足どりは、あきらかでない。この巻の2とする「白水崔十九翁高齋の詩」が翌「天宝十五載五月の作」と注するのからいって、翌年の五月には、奉先の北隣りの県、白水県にうつっている。しかしそれまで半年間の、足どりは分からない。時局はこの半年のあいだに、どんどん進行した。安祿山は反旗をあげた翌月、すなわち天宝十四載の十二月十二日には、東都洛陽を占領している。年をこえて十五載の正月元日には、洛陽を国都として、大燕皇帝を僭称、年号を聖武元年とした。次にねらうのは、玄宗の朝廷のある西都長安である。玄宗は、やはり異民族出身の老将、哥舒翰を、東西二京の中間の要衝である潼関に派遣し、賊の西進をふせがせたこと、のちに再び説く。

かく時局の危機が決定におもむく半年間、杜甫はどこでどうしていたか。家族とともに、じっと奉先の田舎にいたか。あるいは時局の危



急をうれい、またせっかく新しく任ぜられた皇太子禁衛軍つきの課長の職務をむなしくせぬため、家族を奉先においたまま、彼自身は長安にいたか。ないしは奉先と長安との間の往復をくりかえしたか。いずれとも分からぬ。この半年間の詩として日づけをもつものが、ないからである。

ただ一つの詩が、この期間の作である可能性を、確実な証拠はなくして、もつ。奉先県の警察課長、劉氏のために、山水画の屏風に題した詩、「奉先の劉少府が新たに画がきし山水の障の歌」である。ただし詩を年次順にならべた宋代のテクストのうち、もっとも早い北宋の王洙の本、ついで南宋初の呉若の本、九家注本、それらはみなここに配置せず、のちの巻に収める。しかし同じく南宋の本である草堂詩箋は、「奉先県に赴く詠懐」の次におく。清の錢謙益は、草堂詩箋により、このとき奉先県に滞在した間の作と定め、以後、仇兆鰲の「杜詩詳注」、揚倫の「杜詩鏡銓」など、清人の有力な諸注釈、みな錢氏の処置にしたがう。いかにもこの滞在以後、杜甫が再び奉先を訪れた形迹はないのであり、この期間の作である可能性をもつ。しかしまた前引の「橋陵の詩」が示すように、この時期以前にも、杜甫は奉先県をおとすれている。さかのぼって反乱勃発以前の作という可能性もないではない。いまはしばらく錢謙益らの説にしたがい、ここに配置する。

### 1 奉先県庁劉課長えがきしばかりの山水屏風の歌

座敷の上に 不ときにも 楓あきの樹が生えた  
いぶかしの川よ 山よ 霞たなびき 霧わきたつ  
あなたは県の地図をぬりつぶし  
よい機嫌で 大うなばらの気分を かきまくったのだから  
画かきは いくらでもいるが  
上手には お目にかからない

この画の前では 精神がしずまり  
あなたの美術の重厚さをさとる

那岳なぐつ 鄭虔ていけん かれらばかりじゃない  
楊契丹やうきつたん 見え見えさん筆づかい  
崑崙山こんろんざんの片われか

瀟湘の水のはねかえりか  
ひっそりと私は天姥山てんぼざんのふもとに連れてゆかれ  
耳のそばで ほれっ ずしい猿のさけびが 聞こえたようだ

思いかえすのは ゆうべの嵐のはげしさ  
あれは土地の神様の おん乗り込み  
精気とびちって 屏風はまだしめり

宇宙の奉行の苦情に 天つ神も泣きつつら  
田舎の茶屋 春めぐり来て 花花はるけく  
りょうし ゆう方に 小舟ふんまえて立つ

うなばらの水ふかぶかと 大空ひろく  
きりたつ岸 はなれ小島 鶉うすの毛の尖まで  
湘の女神が琴かきならしたもうた昔は知らないが  
今もまだ まだらの竹 川ぞいにみずみずしい

劉君の天才の純粹さ

骨のずいからの絵画すき

そこに出来たは二人の坊や

これまた無類の刷毛さばき

上の坊やは 利濃さかり

絶壁のところへ 老樹を添え

下の坊やは 知恵づいて

坊さんと 子供の 似顔  
 ああ 若耶の 溪谷  
 雲門の 寺  
 わたしだけ は なぜ 泥んこの 中にある  
 わらじだ 脚絆だ さあき これから 出発だ

奉先劉少府新畫山水障  
 歌

堂上不合生楓樹  
 怪底江山起煙霧  
 聞君掃却赤縣圖  
 乘興遺畫滄洲趣

畫師亦無數  
 好手不可遇  
 對此融心神  
 知君重毫素

豈但祁岳與鄭虔  
 筆迹遠過楊契丹  
 得非玄圃裂  
 無乃瀟湘翻

悄然坐我天姥下  
 耳邊已似聞清猿  
 反思前夜風雨急  
 乃是蒲城鬼神入

元氣淋漓障猶濕  
 眞宰上訴天應泣  
 野亭春還雜花遠  
 漁翁暝踏孤舟立

奉先の劉少府の新たに画がきし山水障の歌  
 堂上 合に楓樹を生すべからず  
 怪しむ底の江山か煙霧を起こす  
 聞く君は赤縣の圖を掃却し  
 興に乗じて遺しいままに滄洲の趣きを画く

画師 亦た数無し  
 好手遇う可からず  
 此れに對して心神を融し  
 知る君が毫素を重んずるを  
 豈に但だに祁岳と鄭虔とのみならんや  
 筆跡は遠く過ぐ楊契丹  
 玄圃の裂くるに非ざるを得んや  
 乃ち瀟湘の翻える無からんや  
 悄然として我れを天姥の下に坐せしめ  
 耳邊に清猿を聞くに似たり  
 反つて思ふ前夜風雨急なりしを  
 乃ち是れ蒲城の鬼神入る  
 元氣淋漓として障猶お湿う  
 眞宰上訴して天応に泣くなるべし  
 野亭 春還りて雜花遠く  
 漁翁 暝に孤舟を踏みて立つ

21 滄浪水深青冥闊  
 22 欽岸側島秋毫末  
 23 不見湘妃鼓瑟時  
 24 至今斑竹臨江活  
 25 劉侯天機精  
 26 愛畫入骨髓  
 27 自有兩兒郎  
 28 揮灑亦莫比  
 29 大兒聰明到  
 30 能添老樹巖崖裏  
 31 小兒心孔開  
 32 貌得山僧及童子  
 33 若耶溪  
 34 雲門寺  
 35 吾獨胡爲在泥滓  
 36 青鞵布襪從此始

滄浪 水深くして 青冥 濶く  
 欽岸 側島 秋毫の末  
 見ず湘妃を鼓する時  
 今に至りて 斑竹 江に臨みて活く  
 劉侯 天機 精しく  
 画を愛すること骨髓に入る  
 自のすから 兩兒郎 有り  
 揮灑 亦た比莫し  
 大兒は聰明に到り  
 能く老樹を巖崖の裏に添う  
 小兒は心孔開き  
 貌し得たり 山僧と 童子と  
 若耶溪  
 雲門寺  
 吾れ独り胡為れぞ泥滓に在るや  
 青鞵布襪 此れ從り始めん

〔奉先劉少府〕奉先県庁に勤務する事務官で、劉を姓とする人物。のちに引く「文苑英華」によれば、名は単。またその官職は、尉であった。警察をつかさどる。玄宗のころの唐帝国の官制を記した「大唐六典」三十、「外官」の巻によれば、奉先県は先帝睿宗の陵のある重要な県であるゆえに、県令一人、丞二人、主簿二人の下に、尉六人が置かれていた中の一人。官等は、従八品下であるのと、あい上下する。鈴木虎雄注は、さきの巻一三五の「橋陵の詩三十韻、因りて県内の諸官に呈す」の35に「王と劉とは美しき竹の潤うごとし」とたたえる人物かと疑う。「少府」は長官ならぬ地方官の雅称。「新画山水障」描き立ての山水画の屏風。明の邵宝の分類集注の説に「障は屏障、今の囲屏の若し」。われわれの語では屏風、障立、もしくは襖絵。のち成都での作

にも、「李尊師の松樹の障子に題する歌」がある。またわが京都御所の紫宸殿の「賢聖の障子」も、襖絵であり、その他、奈良平安の文献に、「障子」の語しばしばあるうち、菅原道真の「富家文章」六、「近院の山水障子の詩六首」が、文徳天皇の皇子、右大臣源能有の家のそれを詠ずるのは、ことおなじく「山水の障」である。「歌」とは、歌謡体の活発なリズムの詩。ことにこの「歌」は、1「堂上不合生楓樹」にはじまって、七言、すなわち一行七語のリズムを基幹としつつ、5の「画師亦無数」など五言の句をば十二、33 34では「若耶溪」「雲門寺」と三言の句二つを、自在に投入して、自在にリズムを変動させる用語も、リズムの自在にに応じて自由であり、盛んに俗語を使う。1の「不合」、2の「怪底」、みなすでにそれである。脚韻の踏み方もまた奇絶であり、原文に「符を加えて示したように、五度転換するが、転換は、七言、五言、三言と、行の長さの変化にこだわらない。たとえばさいしょの脚韻は、1の七言の句「堂上不合生楓樹」その「樹」 $shu$ におこって、次には2の「霧」 $mu$ 、3は奇数番目の句の常例として踏まらず、4の「趣」 $su$ と、 $ro$ の去声を脚韻とするのが、次の五言の句四つにもそのまま及ぶのであって、5の「数」 $su$ 、6の「遇」 $yu$ 、8の「素」 $su$ となる。以下もそうであること、後の注で説く。他にあまり例を見ない奇絶の押韻法であり、杜詩でもめずらしい。劉の作画も杜の奇絶の「歌」と、少なくともある程度、応ずるものであったろう。ところで問題は、その画が劉自身によるってえがかれたか、別の画工の筆かということである。近ごろ鈴木虎雄注は、4の「遣」の字を、使役の助動詞とするのから出発して、劉自身の筆でないとする。しかし旧注のおおむねは、劉自身の筆とし、また詩全体からいっても、そう思える。私も劉自身の画業として、積する。なおこのようないわゆる「題画」の詩、杜甫以前にはあまり作例がない。杜甫はこれ以後にも数多くの作があり、且つしばしば七言の「歌」である。その点でも杜甫は新しい詩人であろうことを、かつての拙文で予想した。私の全集二巻「演奏の芸術」五二五—五二六頁。清の沈徳潜の「杜詩偶評」が

この詩の評として、次のようにいうのは、私の予想をたしかめる。「題画の詩、少陵自らして異境を開き出だす。後人往往にして之れを宗とす」。この詩、テクストにより配置の場所がちがうこと、前に述べた。杜甫歿後三百年、十一世紀北宋の王洙が編んだ杜工部集二十卷は、諸テクストの祖。その十二世紀南宋初の刊本二種、いずれも残欠本が伝わるのを、十七世紀明末清初の愛書家毛晋父子が綴り合わせ、不足の部分は他の藏書家から同版を借り、忠実に摸写して補ったのが、近ごろ人民共和國で複製された。私が本文の底本とし、宋本また王洙本と呼ぶものであり、詩型によって古詩と近体詩に二分し、それぞれ年代順なのは巻二。十二世紀南宋郭知達の家集注杜詩三十六卷、編次はほ王洙と同じなのは巻四。十三世紀南宋蔡夢弼の杜工部草堂詩箋四十卷、詩型にこだわらず全詩が編年なのを、明治初、清国公使黎庶昌が、日本遺存の古版から覆刻したのでは巻六。南宋の書肆が詩を部類別にした分門集注杜工部詩、その四部叢刊複製本では巻二十六画。別の分類をした十六世紀明の邵宝の杜少陵先生詩分類集注二十五卷、明曆の和刻があるのでは巻十四歌行画類。清の注釈の代表として、十七世紀仇兆鰲の杜詩詳注二十三卷、全詩編年なのは巻四。また宋初に編まれた六朝と唐の文学の大規模な選集、文苑英華の巻三百三十九、歌行九、画、画山水、には、「新画山水障歌」と題して収め、「奉先の尉なる劉単の宅にての作」と注する。単の音はタンであらう。1「堂上不合生楓樹」堂の上に、不合理にも、不思議にも、あるいは不た形のない方であり、この第一句の発想、すでに奇抜である。また発想の奇抜を強めるのは、「不合」の二字の使用である。二字はマサニ……ベカラズと訓読され、「不当」「不応」と同義だが、「不合」は俗語的である。宋以後では裁判の判決文に頻用され、罪人は「不合キニモ」かくかくせしにより、某の罪を課するという場合に使われる。私の全集十三巻宋篇四二〇頁および五三三頁以下参照。唐のころも、すでにそうした語感にあったとすれば、一そう奇抜の語となる。それ

に対し、「不合ごうごき」にも生えた場所として、句のはじめにある「堂上」は、古典の「礼」の書物に頻見する語である。南面して建てられた母屋の南半分を占めるひろい表座敷。奇抜の語「不合」は、いかめしい「堂上」の語と反襯して、「そう奇抜さを強める。かく堂上」に「不合ごうごき」にも、ぬくぬくと「生は」えた「楓樹」は、和訓カエデであるが、日本のそれではないらしい。近時の辞書は、Liquidambar formosans をもって充て、大きく三つに割れた葉をもち、高さ二三丈という。且つそもそも文学のイメージとしては、南方揚子江流域の植物であつて、古く「楚辭」の「招魂」篇に、「漑漑たる江の水、上に楓有り」といひ、杜甫の尊重した「文選」では、二十三、魏の阮籍の「詠懷」の詩に、「漑漑たる長江の水、上に楓樹の林有り」。それがこ北方奉先県の「堂上」に「生」えているのは、一そう不思議に不合理に不屈きである。なお文苑英華のみ、「堂上」を「堂中」に作る。

## 2

〔怪底江山起煙霧〕第一句の怪訝を継承し拡大して、ふしぎやな、座敷の上に、「煙霧」をまき「起」こすのは、こはそも「底いか」なる「江」また「山」ぞや、と「怪」訝する。ここに使われた「底」も、前の「不合」とおなじく、甚だしい俗語であることが、句の生動を助けている。南宋の詩の大家、楊万里の「誠齋詩話」が、「詩に人を驚かす句有り」の例として、まっさきにあげるのは、この詩の冒頭二句である。うち「底」が唐のころの俗語として「何」を意味する経過については、唐初の考証家顔師古の「匡繆正俗」六に、説がある。且つその説は、この「底」なる語が、今の中国語で「何」を意味する「甚麼」shenma の祖語であることを、間接に示唆する。私の全集七卷「六朝助字小記」四九一—五〇九頁参照。なお杜甫は、他の詩にも、この意味の「底」の字を、「可惜」の詩で「花の飛ぶは底の急いききこと有るや」、「邛州の崔録事に寄す」に「終朝底の忙いがしき有るや」、「解悶十二首」に「性靈を陶冶するに底物を有するや」などと使うが、それら近体詩での用法から見て、仄声、おそらく平声の上声に読んでおり、顔師古のいうごとく平声には読んでいない。「江山」は、「文選」では、

十二、晋の郭璞の「江の賦」などの用語であるが、「煙霧」という熟語は「文選」に見えない。錢謙益が底本とする宋の呉若本の一本は「江山」を「山川」に作る。

## 3

〔聞君掃却赤泉図〕画中の樹木山水を実在かと思つたという歌い出しの奇抜な興奮から醒めて、この句と次の句では、画がえがかれるに至った由来をのべる。まずこの句では、その第一段階として、もこの屏風には「赤泉の図」、それが奉先県の図であつたか中国全土に関する図であつたかは、前人の説が分かれるが、この問題はのちに論ずるとして、あなた劉「君」は、そうした「赤泉の図」を「掃却」除去した。そうして次の句に「滄洲の趣」というような放胆な山水画を、新たに画がき直された、おのれは「聞」く。「掃却」の語につき、清の黄生の「杜詩説」にいう、「是れより先き壁には本邑の山水を図す。劉は滅して重ねて画がく。故に掃却云云と曰う」。黄氏のこの説は正しいであろう。ただ画の下地は壁ではなく、「障」であるから、黄氏のいう「滅」、すなわちぬりつぶしたのではなく、紙を除去したとすべきであろう。「掃却」の二字を、除去の意味にはなく、唐代の絵画文献にも、用例がある。張彦遠の「歴代名画記」三に、東都敬義寺の壁画群を詳叙した中に、中門にある立てる神と鬼二匹の画像は、もと洛陽派の画家劉行臣の筆であつたのを、神英法師なるもの、それを「掃却」して、長安派の画家何長寿に描き直させようと企圖したのを、土地の人士が反対して、とりやめになつたと見える。従来のおおむねの注の説はことなり、「掃」の字を、筆を走らさず、つまりえがく意とする。すなわち劉はさきだつて「赤泉の図」を「掃かき「却」えていたが、こんどは更にこの山水図をえがいたとする。いかにも「掃」の字に、その意がないではない。のち蜀中で韋偃の馬の絵に題して、「戯れに秃筆を拈つて驂駟を掃う」というのなどは、その意である。しかしそれをしてここに施して、劉がさきに別の画をえがいたとして、それをもち出すのでは、詩の焦点がぼやけてしまう。黄生の説がまず我が意を得るに如かない。旁証としての「歴代名画記」は、福永光司氏

の教示による。ところで次の問題は、「掃却」除去された「赤泉図」、旧説によればさきにえがかれたそれである。この三字には、二種の解釈がある。世界には八十一の地域があり、その一つとしての中国は「赤泉神州」と呼ばれるというのが、鄒衍の語として、「史記」の孟子荀卿列伝に見える。それによって、「赤泉の図」とは、中国全体についての図画と見る説が、その一つであって、北宋某氏の旧注を、宋の王洙の説として分門集注が引くのは、それである。第二は、唐の地方行政の術語として、第一級の県は「赤泉」と呼ばれる。劉の勤務すること奉先県は、先帝の陵の所在であるため、そう格づけされていたこと、さきの巻一35「橋陵の詩」の35に「居然として赤泉は立つ」ということとくである。ゆえに「赤泉の図」とは、奉先県に関する図画の意であるとするのが、第二説であって、宋の九家注と分門集注に引く趙次公の説は、それである。要するに「赤泉」の語をもって、全中国とするか、奉先の一県とするかの差違であるが、その点私は判断に迷う。ただ新しい絵の空間とするため、障上のもとを破棄したのであれば、もとの画は、中国総図であるにしろ、奉先県図であるにしろ、行政用の地図であったのでないかと考える。類似の名称のものが、当時の書籍目録である「旧唐書」の「経籍志」、「新唐書」の「芸文志」、なしいは藤原佐世の「日本国現在書目録」に、見えないかと、繰って見たが、見あたらず。歴史地理の専家の教えを待つ。

4 「乘輿遣画滄洲趣」かくて俗悪平凡な「赤泉の図」が障の上にあったのを「掃却」破棄したあなたは、感「興」に「乘」じて、そこに「遣」ぞんぶんに「滄洲」おおうなばらの「趣」気分を、「画」がいた。前句の「聞く君は」が、この句にもかかる。「滄洲の趣」は、えがかれた画の中心となるものであって、語は「文選」二十七、齊の山水詩人謝朓の「宣城之かんとして新林浦に出で版橋に向こう」の、「復た滄洲の趣に叶う」から出る。「文選」の学に達かった杜甫として、必ずそれが意識にあったにちがいない。そうして杜のちの詩「憶昔行」に、「縣圃と滄洲と莽として空濶」というのをかえりみれば、ひろびろと

ひろがった滄溟と洲島である。且つその詩で併せいわれる「懸圃」が、すなわちこの詩次の11の「玄圃」であるのと共に、浮き世の外の仙境である。それを画がいたのが、精神のたかぶりに乗じてであったのを、「乘輿」ということ、これは「文選」に見えない用語だが、もっとも人人の記憶にある用例は、晋の王徽之が、雪の夜に戴逵への訪問を思い立ち、しかも途中からひきかえした際の語、「吾れ本と興に乗じて行く、興尽きて返る」である。「世説新語」の「任誕」篇。ところで「乘輿遣画滄洲趣」というこの句のうち、もっとも問題になるのは、「遣」の字である。私がそれを、ぞんぶんに、ほしのままに、意と読むのは、実は臆説であり、確かな証拠はない。強いていえば、「遣輿」、興を遣る、という語を杜甫がしばしば使うところから、上の「興」の字がここにも作用して、「乗」じた「興」を「遣」らす行為としての意としたのである。明の王嗣奭の「杜臆」は、「赤泉」「滄洲」二図の併存をみとめる点か、私とちがうが、「興に乗じて自ずから遣り、遂に滄洲を写す」というのは、私の考えに近い。ただし「遣」の字の普通の用法は、周知のように、「使一令」などととも、使役の助動詞である。ここもそうであるとすれば、「興に乗じて滄洲の趣きを画がか遣む」ということになる。鈴木虎雄注が、画は劉自身の筆でなく、劉が画工をしてえがかせたとする論拠は、もっともそこにある。また宋の趙次公は、杜甫が「興に乗じて」劉に「滄洲の趣を画か遣めた」とし、「遣」の主格、また「乘輿」の主格をも、杜甫とするが、これは画を劉の自作としつつ、しかも「遣」が普通には使役の辞であるのをを調和しようとして、一そう無理な説となっていると思う。

5 「画師亦無數」ここまでの四句が七言であったのに、以下の四句は五言である。しかし韻脚は、前の七言の部分を受けて、ずっとuの去声をつらねること、題注でも略説した。「画師」は画工。同時の王維の述懐の詩に、「当世にては謬って詞客なるも、前のよの身は応に画師なるべし」とあったと、朱景玄の「唐朝名画録」にいう。ほかの存在が「無数」に多数であるのおなじく、「画師」も「亦」た「無数」

に、この世にいる。

6 「好手不可遇」画かきは無数にいる。しかし上手にはなかなかお目にかからない。「好手」もおそらくは俗語、われわれの語で上手というごとくであろう。清の康熙帝勅編の大規模な詩語辞典である「佩文韻府」、杜甫のこの詩を、最初の用例として引く。また杜詩でも、他には使われていない。使用が稀なことは、普通の詩文には使われにくい俗語であったことを、暗示する。「遇」は偶然の遭遇。「好手」には偶然の遭遇さえ、「不可」能である。遇は去声、偶は上声だが、音声も意味も相近い。ところで以上の二句は、この詩に対してもつ私の一つの不安を、解消するごとくである。すなわち詩によれば、劉の新らしく画がいた山水画は、すばらしいものであった。誠実な杜甫がそういうのだから、お世辞ではあるまい。しかし劉は、絵画史に名をとどめる画人ではない。杜が他の詩でたたえる韓幹や曹霸のように、定まった名声を伝える人物ではない。詩は過褒ではないかという不安である。この不安に対し、「画師亦た無数」という句は、画技に長じた人物の数が、当時すでに多すぎるほどあり、したがって技能相応の名声をむくわれぬ人も多く、劉もまたその一人であった。しかし杜甫はその特殊な鑑賞眼によって、その人を「好手」とみとめたこと、解し得るからである。

7 「对此融心神」〔此〕のあなたの新たに画がける山水の障を〔対〕にすれば、観る者の「心神」を〔融〕けさせる。「融」は、鎔也、長也、朗也と訓じ、恍惚とさせる。「融」の「神」は、心のもつとも崇高な部分。「文選」での用例は、二十二、晋の左思の「招隱の詩」に、「前に寒き泉井有り、聊か心神を寧く可し」。またこの句を導くものとして、南朝宋の宗炳の「山水を画く序」が、無視されはなるまい。「図を披きて幽かに対すれば」、「万趣は其の神思を融す」云云。

8 「知君重毫素」かく此の画が私の「心神」を恍惚にする結果として、私に「知」るのは、劉君よ、「君」という人は、「毫素」絵画の芸術を、「重」慎重に、重厚に、重視すること。つまり芸術家としての良心に

富むこと。「毫素」は筆と白絹。「文選」十七、晋の陸機の「文の賦」に、文章は「唯だ毫素の擬する所なり」、また二十一、宋の顔延之の「五君詠」に、晋の向秀を詠じて、「深き心は毫素に託す」。その李善の注に、「毫は筆なり、書く線を素と曰う」。それらは字を書く材料としての「毫」と「素」なのを、こゝは画に施した。句のはじめの「知」の字は、重量があらう。輕易に下したのではない。

9 「豈但祁岳与鄭虔」豈ニ但ナ祁岳ト鄭虔トノミナランヤ。二つの人名は、当時の定評ある画家。「但」は独と同義。当代の画家は、独り二人のみであろうか、いやあなたもその一人とも説め、次の4の「筆跡は遠く楊契丹にも過ぎたり」の「過ぎたり」が、あらかじめここに作用しているとすれば、独り祁岳と鄭虔にも「過」ぎて、その上にあるばかりでないとも、読める。後説ならば過褒をきらうように思うが、しばらく二説をあわせ提供する。二つの人名のうち、「鄭虔」は、杜甫の親友であり、玄宗皇帝から「詩書画三絶」と称賛され、そのため特に広文館の教官に任ぜられた人物。さきの巻一17「酔える時の歌、広文館博士鄭虔に贈る」その他、杜甫がその人におくった詩の注参照。「祁岳」の方は、履歴がはっきりせず、清の錢謙益に至って、唐の朱景玄の「唐朝名画録」が更に引く李嗣真の「画録」に、「空しく其の名のみ有りて、踪跡を見ず、其の品格を定む可からざる者、凡そ二十九人」とする中に、「祁岳」の名があるのをあげる。但しそのあるテクストは、祝岳である。錢氏はまたその盲目の友人唐汝詢の説として、杜甫の詩友岑参に「祁菜の山東に還るを送る」という詩があり、「時有りて或いは興に乗じ、江上の峰を画がき出だす」というのも、すなわちその人であり、祁岳と祁菜、音近くして誤まったというの、文苑英華が「祈岳」に作るのには、誤字であるが、ところで題注でも触れた詩法の問題として、脚韻この句で転換するが、以下の第二部分の脚韻も七言、五言という句の長さとは、無関係である。すなわちこの七言の句の「虔」gānにはじまって、おなじ脚韻の下の句として、次の七言10の「丹」dānが、次の五言の聯では12の「翻」fān、そうして更に次に

の13・14の七言の聯では、14の「媛」ひなと、平声<sup>ヒナ</sup>の尾音が七言句五言句を通じての韻脚となる。

10 「筆迹遠過楊契丹」〔迹〕は跡と同字。「筆迹」は劉の画筆づかい。それが「遠」く「過」ぎると、比較的媒介にされている「楊契丹」は、隋の画家。張彦遠の「歴代名画記」八に、「官は上儀同に至る。僧悰云う、六法備わり諳ね、甚だ骨氣有り」云云。「筆迹」の語は、のち「曹將軍の画馬の図を観る」にも、「貴戚権門も筆迹を得て、始めて寛妙屏障に光輝を生ずるを」。

11 「得非玄圃裂」画中の山をたたえる。西方の仙山「玄圃」の「裂」けた破片が、この画中の山なのでないか、「非ざるを得んや」。「文選」三漢の張衡の「東京の賦」に、「世界の東端と西端をあげて、「左には陽谷を瞰、右には玄圃を睨む」。あるいは「縣圃」とも表記され、早く「楚辭」の「離騷」篇に、「夕に余れは縣圃に至る」。なおアラザルラエンヤと訓読する「得非」は、もと散文の語。「文選」では、詩に用いられていないばかりでなく、その散文にも同義の「豈非」「莫非」「莫匪」はあっても、「得非」は見えぬ。かく「文選」の美文では、全然用いられないという、強度に散文の語である。それを導入して、詩の骨格を強めるのも、杜甫の詩の新しさである。前前行9の「豈但」、次行12の「無乃」、またしかり。なお「裂」を文苑英華は「拆」に作り、「集」すなわちその見た杜甫集のテクストが「裂」であると注する。二字はほぼ同義。

12 「無乃瀟湘翻」画中の水をたたえる。「翻」は翻と同字。乃チ瀟湘ノ翻ルナル無カラランヤ。湖南省を南北に貫流する湘水に、西方から瀟水が合流するあたりが、「瀟湘」。その水がここに「翻」れ出したのではないか。わが近江八景の母型となるいわゆる「瀟湘八景」は、のち北宋以後の画題であるが、次に引く古い地理書「山海經」をかえりみれば、早くからロマンチックな伝説をもつ水域であった。「山海經」六「中山經」の「中次十二經」の条に、洞庭湖畔の山を叙べて、「又た東南一百二十里を洞庭の山と曰い、帝の二たりの女之れに居る」。のち

の28に「湘妃」の語でいう湘水の女神たちである。「是れら常に江の淵に遊び、禮沈の風もて、瀟湘の淵に交わらしむ」。「文選」の文学では、二十、齊の謝朓の「新亭の渚にて范零陵に別るる詩」に、「洞庭は築を張る野、瀟湘には帝の子遊ぶ」。その李善注は、上述の「山海經」の本文、およびそれに対する晋の郭璞の注を引く。いわく、「此れは二女の江の淵府に遊戯すれば、則ち能く三江を鼓ち、風波の気を令て、共に相い交通せしむるを言う」。しからは二人の女神は、風波をおこす神でもある。それらをかえりみれば、いまここに「翻」っている水も、湘水の女神のおこす風波が、ここに及んだのであるかも知れない。さきの第一巻のあとがきでもいったように、「文選」のすぐれた注者李善は、杜甫の若いころの師李邕の子である。李氏の「文選注」は、「文選」の本文とともに、いつも杜甫の記憶にあるようである。はじめにかぶせた「無乃」は、スナワチ……ナルナカラランヤと訓読される。古典では「左伝」に頻用されるのをはじめ、散文の語。ただし「文選」の詩にも用いられないでなく、二十九、漢の無名氏「古詩十九首」の、「乃ち杞梁の妻なる無からんや」など、二三見える。なおかく眼前の勝景を、名山名水の断片と見る発想は、巻二40「何將軍の山林に遊ぶ」その五の、「剩水追江破れ、残山碣石開く」が、すでにここに同じい。

13 「悄然坐我天姥下」上にさしはさんだ五言の二句で、画を「玄圃」〔瀟湘〕と世界の仙境に連関させたのを承けて、ふたたび七言のリズムに返ったこの聯では、みずから別の幻想の中に置く。ただし奇数番目の句の恒例として、脚韻はふまない。「悄然」として我れを天姥のやまの下に座せしむ。みずから身をおく幻想の地「天姥」は、「玄圃」や「瀟湘」ほど遠くはない。浙江省新昌県に、天台山の支峰としてある山の名であり、杜甫自身も曾遊の地であったことは、晩年の追憶の詩「壯遊」に、二十歳前後の南方旅行、それは現在の詩集にはまだ作品が現われない時期になされた旅行であるが、その追憶として、わが「帰帆は天姥を掃いぬ」といっている。山の名の由来として、宋の樂史の



「太平寰宇記」に、「此の山に登る者は、或いは天の姥の歌謡の声を聞く」。また分門集注に引く黃庭堅は、「吳越郡国志」なるものを引いて「天姥山は括蒼山と相連なる。石壁の上に字有る。高さは識る可からず。春の月には則ち簫鼓笳吹の声を聞く。」「文選」では、二十五、宋の謝靈運の「海嶠に登臨す」云々の詩に、「明に天姥の岑に登る。高く高くとて雲霓に入る。劉君の画は、私にとつても曾遊の地であるそこへ、私を連れてゆき、「悄然」とその「下」に「座」らせる。「悄然」は、寂寞によって緊張する精神の形容。「文選」十三、宋の謝莊の「月の賦」の「悄焉として懐を疚む」の李善注には、「詩経」「擗風」「柏舟」の「憂心悄悄」を引き、「悄は憂うる貌」。

14 「耳辺已似聞清緩」天姥山に連れてゆかれた私は、聴覚にも幻覚をもつ。「緩」は猿と同字。さきに引いた謝靈運の詩に、「哀しき猿は南の響に響く。私の「耳の辺」に「已」くもそれが聞こえる「似」だ。「耳辺」はおそらく俗語。いまの諺に、馬の耳に念仏のことを「耳辺の風」(ear-hat-feng)という。邵宝の本のみは「耳畔」に作る。「清」はなき声のすがすがしさ。「清緩」の語は、「文選」六十、梁の任昉の「齊の竟陵文宣王の行状」の、その庭園を叙したくだりに見える。「已似」を朱鶴齡本のみ「已是」に作る。

15 「反思前夜風雨急」画によって導かれた幻想は、更に積極的に歩を進め、方向を転じて、この画の成立には、超自然の神祕が参与しているとする。まず「反思」思いかえすのは、「前夜」昨夜の「風雨」の「急」激な「急」しさ。「反思」は時間的にさかのぼって昨夜のその時間を思い反すのでもあろうし、この画という結果を生んだ原因として、神祕な風雨を、思い反すのでもあろう。そうした発想の転換に応じ、脚韻もここまでの「平声」というおだやかなのを去って、この句の「急」に転じ、次の16の「入」17の「湿」と毎句に韻をふみつつ、更にのびて18の「立」に及ぶ。そこで終る険仄な音尾である。なお「前夜」の語、杜詩ここにしか用いぬ。昨夜の意として解した。

16 「乃是蒲城鬼神入」思っておこされる昨夜の風雨、それは超自然の精霊

がこの画にのりうつるべく、あるいはこの画の制作を助けるべく、乗り込んで来たのであった。「乃」は和訓はただスナワチだが、ダイの上声、ナというその重なり、音声とともに、「難辞也」と訓ぜられ、摩擦を伴った判断を下す際の助字。昨夜のあらしは、考えて見るに「乃れぞすなわち是れ」ここ「蒲城」(蒲城)の「鬼神」の「入」来であった。「蒲城」はここ奉先県のかつての県名。先帝睿宗の陵がいとなまれて以来、「先に奉える」という現在の名に改められたのである。「入る」に目的語を補うとすれば、劉がこの画のえがいた場所にむかつてでもあろうし、あるいは画そのものにむかつて。とにかく鬼神の「入」来であつた。文苑英華の一本は「乃是」を「恐是」、恐らくは是れ、と推測の語に作る。また呉若本の一本は「蒲城」を「滿城」に作り、分門集注の本文の字体は、どちらにも読める。況神論の中国では、この城にもいろいろの神さまがいたろうから、「滿城」の語も成り立とうが、ぶっつけに「蒲城」である方が、より即物的である。そうして「蒲城鬼神」とあつても、やって来た「鬼神」は、複数であると思われる。古典の嚴密な語としては、「鬼」は人間の成り変つた神、「神」は地祇に対して天神だが、「鬼神」とひっくりめれば、単に神神、精霊たち。

17 「元氣淋漓障猶湿」鬼神が風雨とともに乗り込んで来た証拠として、ほれ画には、神神がもたらした「元氣」宇宙根元のエネルギーが、「淋漓」ぼたぼたとしたり、「障」屏風は、「猶」おまだ「湿」ってゐる。新しく画がかれた山水障の、墨がまだ乾き切らぬのにも、ひっかけて、かくいう画がであろう。「漢書」の「律歴志」に、「太極の元氣は、三」すなわち天地人を「函みて一と為す。「淋漓」は、「文選」八、漢の揚雄の「羽獵の賦」に、「淋漓廓落。表記はちがうが、リン・リリと一の頭韻を踏んだ双声の形容詞。ぼたぼた、づくづく。この句第三部分として、その脚韻に転じてから三句目であり、韻を踏まなくともいいところなのに、「湿」と韻を踏んで、事がらを音声の面からも強調する。

18 「真宰上訴天応泣」神祕への詩的造型は更に一步を進め、画が「淋漓」



とぬれているのは、天の涙だろうとする。すなわち画があまりにも造化の秘密を別扱したため、宇宙の奉行職である「真宰」が、天に「上訴」し、そのため「天」つ神も、「泣」いて「泣」をこぼしたので「叱」ろう。「真宰」の語は、「莊子」の「齊物論」篇に、宇宙の現象がさまざまに分裂することを述べた上、それを主宰するものとして、「真宰」なる者有るが若し」という。「莊子」自体としては、いろいろの解釈が発生していたろうが、私はこの句を上にもパラフレイズしたように読みたいので、天帝のもとにあって宇宙をとりしきる存在、神界の総理大臣の意として読んだ。その訴えにに応じて、「天も応に泣せるなるべし」とは、むかし蒼頡が文字を創作したとき、宇宙の秘密の漏洩を悲しんで、「天は粟を雨らし、鬼は夜を哭く」と、「淮南子」の「本経訓」にいうのを、連想しよう。つまりこの画も、自然の真実をあまりにも真実にうつし、暴露したために、天の涙を買った。「上訴」の語、杜詩このみに用いる。

19 「野亭春還雜花遠」神祕への放恣な空想からひきかえして、画そのものに立ち帰り、この聯の二句は、画中でも甘美な部分を述べる。まず「野亭」郊外の茶屋には、「春還」春たちもどり、「雜花」くさぐさの花が、「遠」くまでつらなる。「野亭」の語、杜甫が愛用すること、他の「野」をかぶせる諸語と同じである。唐以前の歴史の散文に見えないでないが、「文選」には見えない。「春還」の語、杜詩でもここだけに用いるが、春が還って来たの意であり、邵宝が「春去る」と解するのには、誤解と思われる。「雜花」は、「文選」四十三、梁の丘遲が、北朝に亡命した將軍陳伯之に与えた書簡に、陳の故郷のもようを、「暮春三月、江南は草長じて、雜花は地に生じ、群鷺は乱れ飛ぶ」。この句、脚韻を踏まないのは、奇数番目の句の常例として踏まないのである。上の17の「元氣淋漓障猶濕」が、奇数番目の句の韻を踏むのは、神祕の想念が興奮のさなかにあったからであり、ここが常例のごとく韻を踏まないのは、興奮が鎮静して、画そのものの鑑賞へとおだやかに転じたからである。そのことが韻を踏む踏まないによっても示

されている。

20 「漁翁脚踏孤舟立」小舟を踏んまえてつ立つ老いたる漁夫。画中の風景の、又一つの甘美な部分である。「踏」の字、最古のテクストである宋の王洙本のみ「路」に作るが、誤字であろう。他の本すべて「踏」であるのに従う。「漁翁」は、唐詩の語であろう。「文選」の語は、「漁父」もしくは「漁子」。「隈」は日ぐれ。「孤舟」は、陶淵明の「帰去来の辞」に、「或いは孤舟に棹さす」。ところで上の句の「野亭の花」とともに、平和な風景をのべおわったこの聯、押韻は、さきにいきり立つて神祕を歌った四行の韻脚「急」「入」「湿」「泣」とつらなり、依然としてぞを尾音とする「立」であり、不連続の連続の妙を作る。

21 「滄浪水深青冥闊」以下更に画中の景をのべるが、脚韻はまた変わり、この句の「闊」をはじめとして、以下二聯、次句の「末」、24の「活」までは、<sup>二</sup>の尾音をあわせる。わが武元登々莽の「古詩韻範」、文化九年、が、前の<sup>二</sup>と以下の<sup>二</sup>、ともに入声であるゆえ、同じ韻脚の連続とするのに、私は賛成しない。「滄浪」はもと青青とした水の色をサウ・ラウ cang lang と疊韻の語でいうのだが、あるいは個有名ともなっていること、「書経」「禹貢」篇の「滄浪之水」にはじまり、「楚辞」「漁父」篇および「孟子」「離婁」篇に、それぞれ「滄浪の水清まば、以って我がかんむりの纓を洗うべく、滄浪の水濁らば、以って我が足を濯ぐ可し」。いまそれが「深」というのは、画の下部にえがかれていよう。「青冥」を九家注、草堂詩箋などは「青冥」に作るが、王洙本の「青冥」が青ぞらを意味し、それが画の上方に、「闊」くひろがるという方が、すぐれよう。「楚辞」「九章」の「悲淵風」に、「青冥に抛りて虹を撻べん」。なお文苑英華は、一句を「滄浪之水深且闊」とする。それでは水のみがあつて、その上にひろがる大空があらわれない。

22 「欽岸側島秋毫末」ひろがる水、更にその上にひろがる大空の間に、「欽ける岸」また「側ける島」が、点描されている。それは「秋」のけものの「毫」は細いというが、そのまた「末」端ほどのこまかさで描かれている。画の筆づかいの細さでもあり、また視線のきわまるとこ